

(別紙2)

審査の結果の要旨 氏名 加藤 瑞絵

本論文は、10世紀の伝承学者アブー・シャイフの『威厳の書』と題された伝承集の思想研究である。本書に収録された伝承は、自然界に顕れた神の徴に関するものであり、本書はこれまで自然学書として、イスラム科学史の文脈に位置づけられてきた。本論文は科学史という伝統ではなく、禁欲主義やスーフィズムの伝統から本書を捉えたものである。

序論では先行研究を整理し、本書が自然学書としての性質を持つことも確認した上で、先行研究の問題点を指摘し、禁欲主義・スーフィズムとの関係性を考察する必要性を示す。

第1章では著者の生涯と主な著作を紹介し、第2章では『威厳の書』の同名著作について概説する。続く第3章では、まず、『コーラン』の章句や神名注釈論の中で「威厳者(‘azīm)」としての神がいかにか表現されているかを分析する。その分析をもとに、『威厳の書』採録の伝承内容の特徴、さらに本書全体の記述傾向を指摘する。‘azīmの主たる意味は「至大さ」であり、本書では人間には知りえない神の至大さや超越性、絶対性が強調される一方で、神と比べて人間がいかにか小さく弱い存在であるかが強調されることになることを指摘する。

第4章では『威厳の書』第1～3章を主に取り上げ、タファククル(思考、瞑想)という語を中心に考察する。これらの章の伝承の中に、スーフィズムや禁欲主義の実践としてのタファククルと共通する内容を伝える伝承が含まれていることを示す。第5章では人間の成り立ちやその靈魂、他の生物との関係などを示す諸伝承を取り上げ、本書の中で人間存在がいかにか特徴づけられているかを考察し、それらの中にも禁欲主義やスーフィズムとの共通性が見出せることを示す。本書採録の伝承では、神の代理人であるはずの人間の地位が低く、人間のみが持つ理性の能力もあまり重視されない。こうした人間の地位の低さや弱さを語る伝承が、禁欲家の言行や『禁欲の書』に収録された伝承と一致することを明らかにする。

本論文はアラビア語からの訳文に正確さが欠けるところが何箇所もあり、またアブー・シャイフに先行する伝承学者、あるいは彼の後に来る伝承学者との比較が不十分であるなどの改善すべき点があるが、イスラム思想史の中でも、ほとんど取り扱われることがなかった伝承学という分野で、テキストを綿密に読みとき、伝承学と禁欲主義、スーフィズムとの関連を明かにしたことは、十分に評価すべきものである。以上に鑑みて、本審査委員会は本論文が博士(文学)の学位に相当するものと判断する。